

2025 年度前期小論文模範解答

タイトル：限られた空間から生まれる工夫の美

課題文で筆者は、幕の内弁当の美しさは、狭い空間や限られた資源という制約の中で、さまざまな要素をきれいに収め、目と舌の両方で楽しもうとする日本人の工夫から生まれたと述べている。私はこの意見に賛成であり、日本の美の基本は「制約があるからこそ工夫が生まれ、そこに機能性と見た目の美しさが両立すること」にあると考えている。

この「限られた条件の中で最高の工夫をする」という考え方は、工学やものづくりの分野にも深く関係している。例えば、日本の小型車やスマートフォンなどの精密機械は、限られたサイズやバッテリー容量の中で、安全で使いやすく、見た目も美しい製品を作る技術が詰まっている。空間や資源の制限をマイナスとして捉えるのではなく、その中で多様な機能が無駄なく配置して全体のバランスを整える姿勢は、幕の内弁当の配置の美しさとまったく同じである。こうした製品設計は、効率性だけでなく使う人に心地よさを提供している。

現代の社会では、効率や手軽さばかりが優先され、時間をかけて物事を楽しんだり細かな工夫を感じ取ったりすることが減っているように思える。しかし、限られた環境の中で創意工夫を凝らし、ひとつのものを工夫して深く楽しむという日本の美意識は、資源を無駄にせず大切に使いながら質の高い製品や豊かな生活を生み出すために、現代においても非常に重要なものであると考える。

このように、日本の美とは単に見た目が綺麗なことだけではなく、制限された状況を自らの工夫によって乗り越え、機能性と心の豊かさを同時に生み出す姿勢そのものである。私は大学での工学の学びを通じて、この日本の優れた工夫の文化や美意識を科学技術や製品開発の中で大切に引き継いでいきたいと考えている。(753 字)